私のテーマ

万次郎と龍馬

ジョン万次郎研究家
北代　淳二

万次郎の帰国と龍馬

漂流によるとはいえ、鎖国の禁を破って海外に居住したとして、幕府の長崎奉行所で取調べを受けた万次郎と伝蔵、五右衛門兄弟は、無罪放免となり、故郷に帰って来た。

土佐藩から送られた役人たちに連れられて、高知城下に着いたのは嘉永5年（1852）7月11日。アメリカから琉球南端に決死の上陸を果たしてから1年半ほど経っていた。14歳で漂流した後、10年の異文化体験を積んだ万次郎は今や25歳の若者である。

高知城下に入った道筋には久しぶりに帰国した漂流民を見ようと人垣ができた。

坂本龍馬の生家はその道筋である本町筋一丁目にあったが、龍馬が万次郎たちの行列を見たという記録はない。龍馬は天保6年（1835）11月15日生まれで、万次郎より8歳年下である。この年、自宅からほど遠からぬ築屋敷3丁目の日根野弁次に師事して小栗流剣術を修業中だった。

万次郎たち3人は、東堺町の旅亭松尾屋に泊まった。長崎奉行所で既に国禁を犯した罪は晴れているので、高知では取調べではなく3人の海外体験の聞き取りが行われ、二つの文書が作られた。『漂客談奇』と『漂巽紀略』である。

帰国後のこと

『漂客談奇』は当時の土佐藩主山内容堂が大目付の吉田東洋に命じて万次郎らの聞き取りをさせたもので、生憎東洋が病気だったため、配下の吉田文次がこれに当たった。この書は藩上層部の必読の書となり、他藩の大名にまで写本が提供されたという。

『漂巽紀略』の方は、当時新進の画家で学者だった河田小龍が、万次郎ら3人の体験を聞き取ったもので、得意の絵筆を振るった挿絵が多く入っているのが特徴である。

小龍は『漂客談奇』の聞き取りを手伝いながら、万次郎を自宅に住まわせ、日本語を教えると同時に、万次郎から英語を学んだという。小龍は万次郎より3歳年長である。

『漂巽紀略』の原本はいまだに見つかっておらず、写本が10種類ほど現存するだけだ。

安政地震（1954年）のあと、龍馬が小龍を訪ね、のちの海援隊のアイディアを得たという記録があるが、その中に万次郎の名前は出て来ない。

万次郎と伝蔵、五右衛門兄弟は高知城下に3ヶ月ほど滞在の後、10月初めにやっとそれぞれの故郷に帰った。

万次郎が中ノ浜に帰り母親と12年ぶりの劇的な再会を果たしたのは、嘉永5年（1852）10月5日のことである。ところが再会の喜びも束の間。3日後に、高知に帰れとの藩命が届いた。万次郎が持ち帰った世界地図の地名などの翻訳が仕事だった。そして万次郎は「御小者」として土佐藩に召し抱えられた。「小者（こもの）」は武士の最下級だが、漁民から武士へと異例の登用である。

万次郎と龍馬は出会ったか？

嘉永6年（1853）6月、ペリーの黒船来航で日本の情勢は一変する。開国要求の大統領書簡を残して黒船が去った直後、老中の阿部正弘は万次郎を江戸に呼んで、幕府首脳にアメリカ事情を説明させた。そして万次郎を土佐藩から引き抜いて幕府直参のご普請役格とし、江川太郎左衛門（坦庵）の配下に置いた。

江川は万次郎をペリー再来日時の交渉の通訳にさせる意向だったが、水戸の徳川斉昭の反対で実現せず、結局万次郎は幕府の対米交渉に一切関係しなかった。幕府の中枢に、万次郎はアメリカが送り込んだスパイではないかという疑いが根強く残る。

日米和親条約締結後、開国から尊皇攘夷へと日本の情勢は目まぐるしく変わっていくが、万次郎と龍馬の距離が一番近くなったのは、龍馬が勝海舟の弟子になった文久2年（1862）10月のことである。海舟はその2年前、嵐の中の咸臨丸の渡米航海で、実質的な艦長役を万次郎にさせるなど、その実力を知りぬいている。龍馬を万次郎にひき会わせようとしたようだが、万次郎はその2年前に軍艦操練所教授を免職になっていて二人の対面は実現しなかった。その後長崎で二人が近くに滞在したことはあるが、両人が会ったという記録は存在しない。

龍馬（32,3歳頃）

万次郎（48歳）中濱京氏所蔵

江戸期の「文武両道」と「医儒一体」

―幡多沿岸の医儒と中村樋口道場を例として―

土佐史談会関東支部役員
樋口真吉玄孫
角田　慶子

寛政期以前の幡多沿岸の医儒と高知城下

土佐藩主山内家は、転封前の文禄5年（1596）サン・フェリッペ号の浦戸漂着や、慶長5年（1600、関ケ原合戦前）イングランド商館船リーフデ号宿毛沖経由豊後漂着、慶長18又は19年唐船清水来航時黒人が大筒を放したことなどから、2代藩主山内忠義は徳川家康から松平姓を賜り、幕府西日本沿岸警備体制の一翼を担う立場にあって、幕府が奨励する朱子学が発展した。

高知・吸江寺から京に戻った山崎闇斎は垂加神道説を唱え、明暦元年（1655）堀川に闇斎塾を開いた。同時期長崎で和蘭商館医ドイツ人カスパルに学んだ嵐山甫庵、河口良庵、向井元升が京に転居。古方派医儒たちも紅毛流外科を学び研鑽を積み、宝暦4年（1754）山脇東洋（1706～1773）は腑分け実験に及んだ。

寛政元年（1789仏革命の年）9代藩主山内豊雍が重病に陥り、幡多郡下田（現四万十市）で開業していた外科医甲杷瑞益を高知城下に呼び寄せている。父の8代藩主山内豊敷は宝暦14年（1764）藩校「教授館」看板に「徂徠の説は邪中の邪なるものなり」と記した。

この頃、甲杷瑞益（1738～1803）は東洋と並び古方派四大家吉益東洞（長子南涯は華岡青洲の師）門下であった。瑞益は高岡郡窪川（現四万十町）で生まれ、郷土史『仁井田郷談』を残している。樋口真吉の妻兼の祖父瑞益が幡多沿岸の医儒に与えた影響は真吉の幕末維新の糧となった。

中村樋口道場設立と幡多沿岸の医儒たち

文化5年（1808）4／19～6／24伊能忠敬一行が土佐沿岸を測量。同年8月仏第一帝政下ホラント王国となった和蘭国旗を掲げた英軍艦フェートン号長崎入津事件の影響で、長崎警護及び聞役の九州各藩では西洋技術受容も含む学問振興、文と武が強化された。

土佐藩では文化5年に沿岸の甲浦、津呂、須崎、与津、下田、清水、柏島、宿毛に大筒台が設置され、異国船が柏島浦に漂着した文化6年幡多奉行所足軽樋口信四郎が中村に剣「樋口道場」を開設した。

『幡多医師会史』の清水浦地下医師松川玄珠の項に、「文化六巳年右困窮の者共に施薬同然治療致し此の節地中他村共手広く療治せしめ殊に旧家の訳傍御表より御目見御赦免仰せつけられ同八未年御奉行廻見の節奇特の訳を以て銀一両被成遣之（文化11年『12代藩主山内豊資巡見記』とある。「文（医）」の評価に樋口道場の「武」の存在が不可欠であった、当時の文武が伝わる。

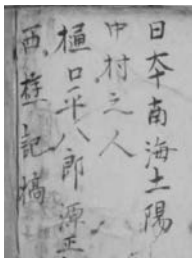
また、樋口道場開設7年後の文化13年、宇和屋次左衛門（遠近鶴鳴）が大坂の篠崎小竹、京の岩垣東園に学び、文政元年（1819）私塾「鶴鳴塾」を中村に開設した。同年には幡多郡下ノ茅（現土佐清水市下ノ加江）の安光命三が華岡青洲塾「合水堂」に入塾している。

安光家は京から一条家に従った家譜を持つ。嫡男命三は先祖の地土佐佐賀（現黒潮町）から下ノ茅に転居。樋口道場主娘（真吉姉・道）と結婚して代々続く医業を極めた。南學史に名を残す命三の従弟、安光南里は上川口（現黒潮町）から樋口道場に通った。文化2年（1805）青洲が全身麻酔下乳癌摘出成功。文政7年シーボルト長崎着。文化文政期の華岡青洲塾土佐入塾者24名のうち幡多郡8名／高岡郡7名／吾川郡3名／安芸郡1名他。幡多沿岸と中村樋口道場の文武振興が判る。

坂本龍馬の義兄高松順蔵の弟高松涛亭が青洲の生地、紀州平山の「迎翠堂」に入塾した頃は、西洋医術受容も進み全国的に入塾者が急増している。

天保8年樋口真吉21歳の九州廻国と「文武両道」

樋口道場主倅真吉21歳は物心付く前から義兄（医儒）や帰農した中村藩士末裔達の文武に育まれ、天保8年九州廻国に出た。アヘン戦争などの時代背景もあるが、直接的要因として天保5年宿毛藩主山内氏固が「講授館」を設立した事や龍馬の義兄の弟、安芸郡安田の高松涛亭が天保5年高知城下新町に開業した事（甲把瑞益を藩主治療に呼び寄せてから45年後）が挙げられる。

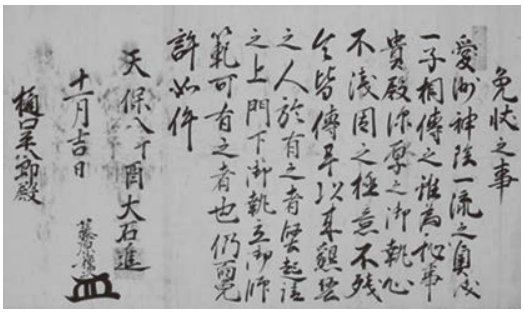


天保8年真吉日記は二冊ある。（四万十市郷土博物館蔵『樋口真吉関係文書1』）。左は試合の相手の名前等を記し、「日本南海土陽　中村之人　樋口平八郎源正利　西遊記稿」。右は歴史理解に基く旅の記録で製本の上押印があり「土陽西部　樋口正利識　西遊記稿畢」と其々記している。

沿岸部に比べ文化文政期中村の華岡青洲合水堂入塾者は唯一人。宿毛郷校も漢籍のみ。中村奉行所に西洋医術受容も含む「文武館」設立を希求した真吉青年21歳の不退転の決意が判る。

真吉青年は豊後上陸後、直ちに熊本藩飛地鶴崎の毛利空桑（くうそう）の朱子学に反する文（尊王）武両道塾を、萩の吉田寅次郎（松陰）が訪問する13年前に訪問している。空桑は四国幡多中村樋口道場主が無外流破門を選択したことを既に聞き及んでいた。父毛利太玄は熊本藩医。篠崎小竹の父も豊後で医を学んでいる。

「寛政異学の禁」で文は武を必要とした。篠崎小竹は中村樋口道場の武と繋がり、樋口家は小竹と頼山陽の関係等、豊後の医儒の交流を承知していた。



真吉は天保8年11月7日柳川藩大石道場で、江戸の幕臣道場を凌駕した大石進の大石神影流免許伝授を「固辞」して、幡多と先祖の歴史に繋がる「藤原種次」の愛洲神陰流免許皆伝書を「諾」。26日礼服神文に身を包み伝書を受け取っている。

12日伝書授与前、大石道場の主だった面々が久留米藩有馬候の鷹狩に真吉を誘っている。中村藩2代藩主山内豊定の正室留里は、久留米藩2代藩主有馬忠頼娘。久留米藩と（幡多）中村藩等、真吉が歴史理解の上で大石神陰流伝書を固辞、愛洲神陰流伝書を諾した真意が伝わる。

また、真吉は天保8、11年何れも長崎鍛冶町の外科道具司広瀬九左衛門宅に泊まっている。

天保8年～文久2年迄の日記を『彬斎嚢語（ひんさいのうご）』とし、華岡青洲に麻酔手術のヒントを与えた永富独嘯（ながとみどくしょう）庵（あん）の著書『嚢語』等、医儒が齎した徂徠思想を理解している。

樋口真吉の幡多奉行所付属「文武館」設立嘆願前後

天保11年（1840）名字帯刀庄屋になった宇和屋遠近鶴鳴は中村を離れ、真吉は鍋島直正（閑叟）の肝いりで改築された佐賀藩校弘道館や西洋技術受容の文と武を体験。弘化2年（1845）11月に幡多奉行所付属文武組織整備を嘆願。翌年篠崎小竹、岩垣東園を訪問している。

弘化4年真吉は毛利空桑と再会。福岡藩城下の亀井塾で、『肥後物語』を記した亀井南冥の『論語語由』を複写。嘉永2年（1849）12月長崎で蘭訳家に会い高島砲術に入門。嘉永3年元旦砲学関係書物を複写している。

足軽真吉の武は藩命である砲術を含む。

また、正月8日には亀井南冥に学んだ広瀬淡窓を日田に訪問している。亀井学派を中村に導入するに当たり、庶民の金毘羅宮に掲げられた亀井昭陽の書を確認するなど多方面から調査検証している。

万次郎帰国と樋口真吉

中浜万次郎と幕府剣術指南役娘との媒酌人である江川英龍（1801～1855）が庇護した、神道無念流の斎藤弥九郎は儒学を古賀精里、兵学を平山行蔵、砲術を高島秋帆に学んでいる。

樋口道場主信四郎の墓碑銘撰文者斎藤拙堂と真吉の号命名者篠崎小竹は共に江戸昌平黌の古賀精里門下。樋口道場の武が昌平黌古賀精里（佐賀藩士）に繋がる。

高島砲術門下の真吉は嘉永5年（1852）6月24日土佐の受取人が来る前日、漂客人万次郎と面談。28日高島先生へ暇を告げ、29日書を高島氏へ送り、10月6日江戸着。

12月20日土佐支藩「土佐新田（しんでん）藩」麻布藩邸に招かれ、嘉永6年1月6日佐久間象山塾入門後連日木挽町の象山塾に通い、26日には象山塾の帰り麻布新田藩邸を訪問。江戸からの帰路、大坂で道場門弟の弘田玄又が学んだ『合水堂』と『洪庵塾』を訪問している。

精密な砲台設計図を残す真吉は江川英龍の韮山反射炉の完成無くして砲台設置は無意味を知り、万次郎が持ち帰った西洋技術の文武を支持する。

また、万次郎幼少期の沿岸部では松川玄珠等が家塾を開き、住民に文字を教えていた。玄珠に疫学天文兵書等を学んだ中濱浦の池道之助は中村樋口道場に通い文武を極め、慶應2年中濱万次郎等の上海行に同道している。

終わりにかえて

嘉永5年10月長崎から江戸に到着した真吉（子文）に間埼哲馬（滄浪）が贈った漢詩

「『龍虎欲飛騰』因賦贈子文伝」が残る。真吉は樋口道場に通った間崎哲馬の恩師である。

「腰下双剣長不勝　腹中龍虎欲飛騰　東海壮士挟之去　蹴破山河幾万層　―以下略―」

「蹴破山河幾万層」は斎藤監物が南北朝期の「兒島高徳」を詠んだ漢詩「踏破千山萬岳煙」を踏んでおり、真吉の文は主に歴史理解にあったことが解る。

「腹中の龍虎」とは、奉行所がある中村では実現難しい西洋医学、技術受容の文武両道のこと。

万次郎の帰国で漸く実現するであろう期待と、天保8年無外流破門を選択して九州廻国に赴いてから「文武館」設立実現のための苦闘がにじみ出ている。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

参考資料

平尾道雄「土佐藩」
松方冬子「阿蘭風説書と近世日本」
鳥居裕美子「九州の蘭学―越境と交流―」
華岡青洲顕彰会編「医聖華岡青洲」
中村真一郎「頼山陽とその時代」
下茅の歴史（土佐清水市図書館蔵）
「幡多医師会史」「憲章簿」
「宿毛市史大分県人名辞典」
川村敬一「亀井南冥小伝」
渋谷雅之「近世土佐の群像6樋口眞吉日記上」
松尾晋一「江戸幕府の対外政策と沿岸警備」

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（四十五）―

話の長い人

宮川　禎一

話の長い人はたいがい嫌われる。若い人からは「あの人は自慢話ばかりで、話は長いのに中身がないんだよな」などと思われるのがオチだ。そうならないように簡潔にしゃべっているつもりだが、ついつい昔話を繰り返してしまう年頃だ。気を付けよう。

坂本龍馬もまた「話の長い人」だったから年齢の問題でもない。乙女姉さんへ宛てた手紙に長さ5mを超えるものがあるので、普段からよくしゃべっていただろう。

龍馬の長話で有名なのは慶応三年十二月初めに越前福井の宿屋（莨屋）で三岡八郎（由利公正）と新国家の財政問題を話し合った時だ。朝の八時頃から深夜十二時頃まで話し込んだのだ。連続十六時間である。三岡も負けじとしゃべったはずだ。無駄な話ではない。日本国の財政方針を決めた極めて重大なおしゃべりだったのだ。お互いに話す内容がたくさんあり、様々なアイデアが飛びかったと思われる。金銀貨幣に代わる紙幣（太政官札）の発行など、日本の近代化に貢献した大事な長話である。

最近、鳥獣戯画のことを調べていたら『沙石集』という鎌倉時代後期の書物に、高山寺の明恵上人の長話の話が載っていた。

寺を訪ねてきた僧侶に明恵は「解脱の道に入るひとのあるべき様」について夕方から語り始め（泣きながら）、通夜（よもすがら）語りあかし、次の日も「かたりくらし」、鐘が鳴ったので「これはなにの鐘ぞ」と明恵が問うと、答えは「日没」、という記述だ。

なんと二十四時間以上も話し続けたのだ。食べず、眠らずの丸一日だ。長い。長すぎる。龍馬・三岡の記録を抜いている。

明恵上人と龍馬の長話は無駄に長いのではなく、頭の中に話すべき内容が山のようにあり、それも多岐にわたり、短い時間では伝えられないほどあったのであろう。

話が長いことを嫌わずに、その中身で評価して欲しい。歴史上の人物の研究テーマに「話の長い人」という切り口もあるように思う。

京都市右京区にある栂尾山高山寺の石水院の山門

“話してみるかよ”

龍馬の許婚（いいなづけ）千葉佐那(1)「さな子と小田切謙明夫妻」

石川　明美（山梨龍馬会甲斐援隊 会長）

坂本龍馬の許婚だった千葉佐那のお墓は、山梨県甲府市にあります。そのため甲府では、墓石に刻まれた「千葉さな子」と同様に書いたり呼んだりします。さな子の墓を建てたのは、自由民権家・小田切謙明（けんめい）の妻豊次（とよじ）で、「清運寺」（同市朝日町）の小田切家墓地の中にあります。

小田切謙明は弘化3（1846）年甲府市に生まれ、父と共に自由民権運動に身を投じました。山梨県会議員となった明治14（1881）年に板垣退助を党首とする自由党が誕生すると、県内のトップを切って党員となります。板垣とは甲府来甲以来の知己で、その後第一回、第二回総選挙に打って出ますが、中央政界進出は果たせませんでした。

しかし一方で、謙明は私財を投じて甲府市内に鉱泉二ヶ所を発見し、温泉と町作りに邁進します。鉄道中央線敷設運動も推進した謙明の徳を慕って、町内の人たちは存命中から生き神様「海舟大権現」として崇めました。

明治24（1891）年、中風を病んだ謙明は、板垣の紹介で豊次とともに治療のために東京千住の「千葉灸治院」を訪ね、さな子と出会います。謙明は明治26（1893）年4月に47歳で亡くなりますが、豊次はその後もさな子と交流を続けます。

さな子は明治29（1896）年10月58歳で亡くなった後、末妹はまの夫、熊木庄之助によって谷中霊園に埋葬されますが、豊次は分骨をして小田切家の墓地にお墓を建てました。自然墓石には「千葉さな子墓」裏には「坂本龍馬室」と刻まれています。また、謙明夫妻墓の碑文は板垣によるものです。

千葉さな子の墓
＝甲府市「清運寺」内

第13回 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 研究発表会
テーマ「龍馬の思想と行動」

●日時　2021年5月22日（土）10:00～17:20（会員総会9:20～）
●会場　高知県立坂本龍馬記念館 新館ホール
●定員　60名（参加無料・要申込）

《研究発表》
10:10～ **網屋 喜行** 氏（鹿児島県立短期大学名誉教授（「吉田」本家末裔）
「石尾芳久氏の『海南政典』研究と分析道具のウェーバー『官僚制論』」

11:10～ **山本 修** 氏（株式会社便利堂 コロタイプ研究所所長）
「コロタイプ技術で龍馬の手紙を複製する～100年以上前から続く古い写真印刷技術の話～」

《特別講演》
13:30～ **大石 学** 氏（日本芸術文化振興会 監事）
「坂本龍馬の現代的意義」

《研究発表》
15:10～ **坂本 世津夫** 氏（国立大学法人愛媛大学 社会連携推進機構教授「地域連携コーディネーター」）
「明智光秀と龍馬」

16:10～ **前田 由紀枝** 氏（高知県立坂本龍馬記念館 学芸課長）
「『新葉和歌集』を手がかりに龍馬の思想と歌心を考える」

※当日は一部リモートによっての発表となります。人数制限もあるため、講演及び発表については、同時あるいは録画配信を考えております。決まり次第HP等でお知らせいたします。
※参加ご希望の方は現代龍馬学会事務局までお申込みください。状況により定員数の増減、また発表形式や時間・内容を変更する場合がございますので、ご了承ください。
お申込み・お問い合わせは下記事務局まで。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp